

将来は母国と日本の懸け橋の存在に

ミャンマー人の留学生が寄稿

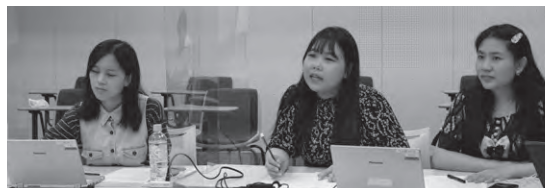


留学相談会で通訳兼回答者として活躍した メイ ヤモンカインさん、ジントウトウアウンさん、ピョーピエーターダーさん(左から)

“後輩”の中大留学をサポート、 母国とのオンライン相談会では通訳兼回答者

今年9月4日、ミャンマーから日本への留学(進学)フェア「Online Study in Japan Weeks 2020」で、中央大学の相談会イベントがオンラインで開催されました。ミャンマーから中大への留学生3人、メイ ヤモンカインさん(法4)、ジントウトウアウンさん(商3)、ピョーピエーターダーさん(商3)が、通訳兼回答者として、多摩キャンパスの中大ブースに参加し、大活躍しました。日本はミャンマーでは最も人気のある留学先で、このフェアは、ヤンゴン(ミャンマー)で毎年開催されている大きな催しだそうです。

留学相談会を「貴重な体験だった」と振り返るジントウトウアウンさん、ピョーピエーターダーさんの2人に、相談会の感想や、来日して感じていることなどを寄稿してもらいました。卒業後は、2人とも母国と日本の懸け橋となる仕事をしたいと夢を描いているといいます。



留学生は805人、 中央大学、大学院には5月1日現在で、留学生805人が在籍している(国際センターまとめ)。国・地域別では、中国が最多の601人、次いで韓国98人、香港15人。フランスとマレーシア、台湾が各14人と続く。ミャンマー人留学生は3人。
最多は中国601人

商学部3年 ジントウトウアウンさん(ZIN Thu Thu Aung)

学びに自由と責任を感じた

ミャンマーの大学のシステムは、決められた学年で決められた科目を履修し、合格するように頑張らなければならない。日本では1年生から自分の履修したい科目を選択でき、自由とともに責任を感じました。ミャンマーの大学と違う日本の大学に入学して本当に良かったと思っています。

日本では自分で決めてやらなければならないことが多くて大変だと思うこともあります。自分でやったからこそ、自信を持てるようになる。自分の成長を感じるようになりました。中央大学では、何か分からないことがあれば、学部事務室や国際センターで、職員の方々に何でも自由に聞けますし、丁寧に説明してもらっています。先生も留学生が分かるように簡単な言葉で説明してくれて、もっと勉強したいという気持ちが強まりました。

貿易に関する仕事に就きたい

今回の留学相談会には、1人でも多くのミャンマーの後輩が中大に入学するきっかけになってほしいという思いで参加しました。私が入学を希望したのもミャンマー人の先輩がいたからです。先輩がいれば進学しても大丈夫という安心感があり、第1希望にしました。だから今回も、自分たちを見て、まず安心してほしいと思いました。

同時通訳は難しく、自分の話がちゃんと届いているかを不安に感じたこともありますが、中大の知らなかったところを学んだりできて、私にとっても貴重な体験でした。

ミャンマーでは外国語の大学で日本語を専門に勉強しました。貿易に関する仕事に就きたいため、日本への留学を決めました。卒業後は日本で就職したい。現在はさまざまなインターンシップに参加したり、ミャンマー人の先輩の体験などを聞いたりして、就職活動の準備をしています。

将来の夢は、日本とミャンマーの懸け橋になるような仕事をする事です。できれば自分の会社を作りたい。卒業後は日本の企業に就職し、いろいろな経験を重ねたいと思っています。

留学して楽しかったことの1つは、アルバイト先でいろい



ろなお客さんに声をかけられたこと。レストランで初めてお客さんに料理を出し、緊張して料理の説明をしたとき、笑顔で「ありがとうね」と優しい目で言われたのが、一番印象に残っている出来事です。もっと頑張ろうという気持ちになったし、仕事のやりがいを感じるようになった。自分の成長に結び付く経験だったと思っています。

ミャンマー人には名字がない

ミャンマー人は名字がないのです。自己紹介で名字や名前を別々に聞かれ、名字がないことを伝えると、だいたいの日本人は驚きます。初めは、そのことに私も逆にショックを受けました。

また、カルチャーショックを受けたのは日本の温泉です。日本語学校の卒業旅行で初めて温泉に入ることになり、ロッカーの前で服を脱ぎようと思っていたとき、中から5人くらいのおばあさんたちが出てきたのを見て、「日本の温泉って、本当にそのままなんだ」と驚いたことが印象に残っています。

日本人には「だめならだめ。できないならできない」と、物事をはっきり言ってほしいときがあります。曖昧に返事をされて、どうすればいいかわからないことがありますから。

商学部3年 ピョーピエーターダーさん(PHYO PYAE Thawdar)

より多くのミャンマー人留学生が中大に来てほしい

今のところ中央大学ではミャンマー人の留学生は3人しかいないので、より多くのミャンマー人の留学生が中央大学に来てほしいという気持ちで、この相談会に参加しました。

日本での留学生活は、もし私が将来帰国したとしても貴重な経験であると言えます。私は2016年4月、来日しました。アニメの中で出てきた食べ物は本当に存在するのだというのが、日本での最初の印象です。

ウェブで「個性を重視する」という中央大学の文言が目に入り、「他の大学では見たことがない」と考えながら出願して、合格することができました。

時にははっきり伝えてほしい

留学生活は楽しいことも、辛いこともあります。勉強では、わからないことがあれば、先生に聞いたり、先輩に聞いたりして、こなしています。しかし、日本語に慣れていないこと、言葉が通じないこと、文化の違いには困ることも多いです。

たとえば、日本人は話を最後まで話さない。「できない」というときも、はっきり断らないという点です。最初はわからなかったけれど、日本での生活が長くなり、だんだん慣れてきて、自分の話し方もそんな感じになりました。日本人は他人を傷つけないように遠慮しながら話すからですね。他人に対する思いやりはわかりますが、時にははっきり伝えてほしいと思います。

日本に来てカルチャーショックを受けたこともあります。たとえば、電車の中で他人の足を踏んだとき、自分が悪くなくても日本人は先に謝ります。「ん？」っていう気持ちでした。また、エスカレーターに乗るときは、動かずに立っている列と、歩いて前に進む列という2つの列を分けて、きれいに並びます。まるで法律で決まっているみたいに同じ行動を取る



ことに驚きました。電車を待つときもきれいに並びますね。笑われるかもしれませんが、私の国では並ぶ人は乗れないです。

できれば自分の会社を持ちたい

大学1年生のときは専門用語の多さにとても苦労しましたが、日本人の友達から説明してもらい、非常に助かりました。授業の面だけではなく、生活面でもさまざまな国の友達から手伝ってもらいました。アルバイトを紹介してもらったり、授業で教わらないような言葉を教えてもらったり、楽しく過ごしています。

私の将来の夢は、母国と日本の懸け橋になることです。できれば、自分の会社を持ちたいです。母国の教育や貧困問題をビジネスの視点から考えて、国の経済発展のために力になれたらいいと考えています。



ルームメイトの誕生日を祝う高山さん(右から2人目)▲

トルコ留学レポートが日本学生支援機構ウェブマガジンに掲載、
豪州の小学校での日本語インターン体験一。

FLP国際協力プログラム中川康弘ゼミで学ぶ学生2人が、
海外で得た有意義な体験を報告します

FLP国際協力プログラム中川康弘ゼミ

日本語教育・多文化教育を軸に国際協力と多文化共生を考えるゼミ。ゼミ生の調査テーマは、「青年海外協力隊活動の今日的意義」「国内外における日本語教育の社会的役割」「性的マイノリティーの語りからみる多文化共生のあり方」など。文献とフィールド調査等を通じて支援すること、対話することの意味を問いながら、皆で学びに取り組んでいる。

トルコ留学レポート 日本学生支援機構 ウェブマガジンに掲載



さえ
高山 桜笑さん(総合政策3)

2019年9月から約4カ月間、トルコに留学した高山桜笑さん(総合政策3)の海外留学レポートが、日本学生支援機構(JASSO)のウェブマガジン「留学交流」(2020年5月号)に掲載された。イスラームの社会や文化に関心があったことなどからトルコを留学先に選んだ。「トルコ人と日本人の知識量の差に関する一考察—トルコ留学時のダイアリーから—」と題した留学レポートには、貴重な体験や得られた知識などを記し、国際交流の真の意義を考察している。

青森県立八戸高校時代、県教育委員会主催の留学プログラムで台湾、韓国を訪れ、海外をより身近に感じたことが大学での留学の動機づけとなった。トルコの首都、アンカラにある中東工科大学で社会学を専攻し、興味を持っていた「女性の社会的地位」について学んだ。イスラームの社会では女性が抑圧されていると考えられがちだが、社会階層がほぼ固定され、貧困層は学校に通えずに早婚などにつながっているという実態が分かったという。

身についた「積極性」

滞在先は大学敷地内の寮。4人部屋でアゼルバイジャン、台湾、韓

国のルームメイトと過ごした。ルームメイトや大勢の学生と関わる中で、「積極性」を身につけ、社会との向き合い方を見つめ直すようになったこと。これが留学を通して得られた大きな収穫だった。「嫌なことはやめてほしい」と口にする友人を見て、「言わなくては分かってもらえない」と自分の意見をはっきり伝えるようになったという。

それぞれの国、地域の政治や文化について深く知ることができる機会と捉え、部屋での会話を大切にしました。日本の政治や社会問題について上手に説明できなかった自分に歯がゆさを覚え、当事者意識をもって社会問題などに向き合うようになっていった。

国際協力 「対話への転換を」

トルコの魅力は、「やはり親日の人が多いこと」。日本人と分かると商品などをおまけしてくれたり、日本に関する話を振ってくれたりする人が多かった。また、突然停電したり、水道水が濁って使えなくなったりと、日本と異なるところも少なくなかった。学生証が発行されるまで1カ月以上かかり、「のんびりしているなあ」と感じたという。

留学レポートでは「両国が長い間友好関係を築いてきたことは事実」としながらも、「全体的にみて国と国同士のつながりは強いが、人と人同士のつながりが弱いのではないだろ

うか」と推察している。

国際協力という意味で、何が必要で何を改善すべきか。高山さんは「お互いが関わっていく中で、さまざまな発見がある。一方的な知識などの提供ではなく、まずは対話に転換していくべきだ」と指摘する。

留学中にたくさんの学生に助けられたため、中央大学への留学生が困っているときは力になりたいという。

留学生は約1,700人 首都アンカラの中東工科大学

高山桜笑さんが留学した中東工科大学は、中央大学の協定校。留学生は、交換留学生と4年間の通学生を合わせて約1700人が在籍していた。中央アジアからの留学生が多い印象を受けたという。留学が決まると、英語で行われる総合政策学部の講義を受けるなどして準備した。中東工科大は英語を流ちょうに話す教授も多く、事前の準備が役立った。授業は他国に引けを取らないレベルだったという。

「リアルな日本」 「ありのままの自分」 日本語、日本文化を伝える



浦田 瑞希さん(経済2)

“Thank you, Mizuki !” 今年2月の1カ月間、日本語や日本文化を教える講師として授業を担当したオーストラリアの小学校での別れの日、児童たちがかけてくれた声に胸がいっぱいになった。浦田瑞希さん(経済2)は、講師としての契約や授業の準備、滞在中のスケジュール調整の全てを、代理店などのエージェントを介さずに一人で行った。「異国の地での活動が確かな自信になりました」と振り返っている。

契約、授業の準備、 スケジュール調整… 独力で切り開く

授業を受け持った学校は、ビクトリア州の州都メルボルンの東約280キロに位置するバーズデールのラ

クナウ小学校(Lucknow Primary School)。「Language and Culture class」という授業で9クラス(1クラスは約20人)を担当し、「あいさつ」「食べ物」「アニメ・ドラえもん」「折り紙」などをテーマに日本語や日本文化を教えた。小学校とイン

ターンシップ契約を交わし、経済学部の「グローバル人材育成奨学金」を受けた。

1カ月という期間限定の、いわばイレギュラーな講師に対し、学校側から「こういう授業内容で」という指示があったわけではなく、当初は「自

分から行動しなければ何も始まらない環境」に悩んだこともあった。

しかし、短期の契約で「今しかない」という思いから、何ができるかを見つめ直し、本やメディアを通して知ることのできる伝統文化を伝えるのではなく、自分が体験してきた「リアルな日本」「ありのままの自分」を伝えることが大切だと気づいた。用意していた授業内容を変え、等身大の自分を分かりやすく伝えられるよう努めた。

たとえば、「日本食」がテーマの授業では、すしやラーメンとともに、自身が苦手な牛乳を昼休みになっても一人教室に残って飲んでいたエピソードを交えて、学校給食についても紹介した。

高校でも姉妹校交流で 豪州へ

神奈川県立弥栄高校に在学中、姉妹校交流の一環でオーストラリアの小学校を訪問した際、「もっと日本を知ってほしい」と感じたことが今回の活動のきっかけとなった。契約や宿泊先の提供など、さまざまな面でサポートしてくれたのも、高校時代に迎え入れてくれた現地のファミリーだった。

受け持ちの授業がない時間には、ほかの先生から図画工作や体育、算数などの授業に参加させてもらい、自画像を描いたり、児童と一緒に走ったり、数式を解いたり、時には子供たちと並んで席に着いて勉強したりと、数々の貴重な経験もした。

将来は「日本の魅力を 海外に発信する仕事を」

たくさんのオーストラリアの魅力を知った1カ月だったと同時に、気づかなかった日本の魅力に気付いた経験となった。19年間、生活してきた日本について、外からの視点で考える時間だったと思っている。

異国の地で1人で活動したことは、「それまでなかった行動力が身についた証し。自分に自信を持てた」と振り返り、支えてくれた人たちに感謝する。「将来は日本の魅力を海外に発信する仕事をしたい。どのような仕事、職種が私に向いているかをこれからの大学生活の中で探っていきたい」と前を見据えている。

オーストラリアの子供たちに折り紙づくりも手ほどきした▼

